
IS(インフィニット・ストラトス) ～何というチート人生～

メフィスン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 〽何というチート人生〽

【Nコード】

N2188Z

【作者名】

メフィスン

【あらすじ】

俺の名前は久遠 龍二。目を覚ますとそこは見知らぬ場所だったんだ。しかもいきなり神様が現れて……俺の人生どうなるの！？この小説はオリ主が一夏ラウ“アーズのキャラとイチャイチャする、そんな話です。あと、オリ主はチートです。それは断言できます。

始まりは突然（前書き）

あの………すいません！もう片方が全く書けていないのに新作始めちゃって……

けど、頑張って行きますので………よろしくお願いします！

始まりは突然

「……………ここ、何処だ？」

目が覚めると全く知らない場所に居ました。いや、俺はこんなところに来た覚えは無い。そうこう考えていたら、

「おお、目が覚めたか」

「うおっ！？だ、誰だよ！」

目の前に変なじいさんが現れた。いや、何だよこれ！夢か、夢なんだよな！

「違うぞ、夢ではない……………僕はお主から神と崇められとる者じゃ」

「はあ？か、神が何で俺の目の前に居るんだ？……………ってか心読むな！」

「おお、すまんすまん。しかしな、急ぎの用があるんじゃ」

「俺も学校があるんだよ！早くしてくれ！」

そう、俺は高校生なんだ。だから早くしないと学校に遅れる！

「ああ、その話なんじゃが……………お主、行かんでいいぞ。というか、行けん」

「……………はい？」

突然何だよ！自称神が現れたかと思うと学校に行けないって……………どういうこと？

「すまん、儂らのミスでお主を死なせてしまったのじゃ」
「何！？つーか、お前らの責任かぁ！！」

いきなり死の宣告来ました。って何で死んだんだっけ？……………ああ、
そっぴや通り魔に刺されたんだっけ…………

「すまんっと言ってるであろう。だから責任を取って転生させてやる。ただし、元の世界は無理じゃぞ？」

「……………転生？それって、小説の世界とかも行けるのか？」

「儂の手にかかれば何処でも行けるわい！」

いや、胸を張られても……………つか、それなら……………戦争とかは無し
だな。すぐ殺されちまうもんな。

「それなら問題無い！お詫びにお主の願いをいくつか聞いてやる」
「それマジか！？」

なんか話がいい方向に？まあいいか。

「それでは、戦争が起こっている世界でいいのか？」

「いやいやいや！そんな事無いですよ！」

「……………変わり身が早い。それじゃあ、何処がいいのじゃ？」

うーん……………仮面ライダー好きだったからなあ、そこでもいいけど…………
…ここはあえて、

「ISの世界でお願いします！」

「IS……………？はて、どんな世界じゃったか……………」

「えっと、インフィニット・ストラトス……………だったような」

「ああ、あれか。分かった……それでお主の願いは？」

ふっふっふっ、これで俺はハーレムの中に……

「とりあえず、男のまま転生がいいです」

「了解した。……っという事は、ISに乗る才能もいるな？」

「はい！お願いします！」

「いいんじゃない、俺の責任だから……後は何がいいかの？」

「えっと、素手でISと戦える身体能力は……いけますかね？」

「むむっ、何故そんな能力が……ああ、なるほどな……分かった」

俺の心を読んだが、俺も良く考えて無かったんだが……まあ、いいか。

「それで、後は何かあるかな？」

「ええっと……専用機が欲しいんですけど」

「任せい！俺の手にかかれば最強の専用機を用意してやる！」

ん……？急に張り切ったぞ、そういうの得意なのか？

「ああそうなんじゃよ 俺はそういうの作るの大好きなんじゃ それでどうなのがいいのじゃ？」

また心読んでる……

「えっとですね……平成仮面ライダーに変形できるISがいいんですけど……」

「なぬ？……それは、何だ、あの……サブライダーもなのか？」

目を光らせてこっちを見ないで欲しい。

「えっと、出来たらそうして欲しいなあって……」

「任せい！それくらい無いとつまらん！それで、カブトとかのじやが……どうすればいいんじゃない？」

「どうすれば、というと？」

「ベルトに装着されたまま、か……原作通り自律稼働させるのかなのじゃが」

「もちろん、後者で！えっと、よろしければ、キバとかもそれでいけるでしょうか？」

「むむっ、任せよ！……久しぶりに楽しめそうじゃ……（ボソッ）」

ん？今楽しめそうとかなんとか……

「おっと、話がずれたの……それじゃあ、お主が目覚めたら……

…そうだな、IS学園入学1週間前のあたりになっておる」

「あ、ありがとうございます」

「いいんじゃない、気にするな。……それとだな、お主は篠ノ之 束と生活しとるようになっておる」

「……はい？」

「あのじゃな、お主は篠ノ之 束と共に生活をしとるという事になつとる。そうすれば、専用機持つとる理由にもなるじゃろ？」

ああ、なるほどなあ………ただどあの人かあ………

「まあ、気にするな。チート、というんじゃないか？そんな機体を持てるのじゃからな」

「ま、まあそうですけど……」

「よし、そうとなれば出発じゃ。ISは後から送るからの！」

そう神が言つと、俺の意識が遠ざかっていった。

始まりは突然（後書き）

感想、批判などございましたら、感想にお書きください。

オリジナル主人公 & a m p ; I S 設定

名前：久遠 龍二（くどう りゅうじ）

年齢：15歳

身長：169cm

体重：68kg

容姿：黒髪で肩まで伸ばしている。目は両方とも黒。だが、電王を使用している場合はそのフォームに合わせた色になる。

性格：周りをよく笑わせる陽気な性格。だが、試合などには真剣に取り組む。

備考：篠ノ乃 束とは共に暮らしていたため、仲が良い。また、IS学園に来るまでは、束の研究を手伝っていたため、ISの知識は大体頭の中に入っている。

ISの設定

IS名：オールドライバー

能力：平成の仮面ライダー全てに変形をすることができる。また、タツロットや、カブトゼクターなどは、龍二の意思で呼び出せる。キバットバット三世は常に龍二の側に飛んでおり、クラス全員が存在を知っている。また、戦闘にアドバイスをしてくれる、オペレーターの役割も果たしている。

また、飛ぶ事は基本出来ない。

待機形態は、腕時計型のデイクイドライバー。

オリジナル主人公 & amp; i S 設定（後書き）

..... 原作を知らないバカですが、頑張ります.....

束さん登場と黒歴史とIS学園入学

「……………ん……………うくん……………りゅーくん！」

「ん……………ここ、は……………？」

誰かが俺の名前を呼んでいる気がした、っていうか絶対呼んでいたのだが、ここがどこなのか分からん。

「りゅーくん やつと起きたんだね」

「……………束さん……………」

「そつだよ おはよう、りゅーくん！」

名前を呼んでいる方を向くと……………篠ノ乃束が立っていた。そして俺が起きたのに気づくと抱きついてきた。嬉しいんだけど……………息が、息が！

「おい束、龍二が苦しそうにしてるぞ？」

「え？つて、あー！りゅーくん大丈夫かい！？」

「いち、おう…？」

誰かが注意してくれたみたいなんだが……………あの声どつかで聞いたよ
うな……………

あゝそんなことより空気うめー！

「りゅーくん、朝ご飯だからね 早く降りてこないと束さんが全部
食べちゃうぞ」

そう言つて部屋から出ていく束……………さん。一応年下だしなあ、『さん』付けはしないよね！

「おい龍二！聞こえてるか？」

「ん、ああ……………ってキバット！？」

声のした方を向くと、キバットバット三世が飛んでいた。いやいや、おかしいだろ！？っていうか……………

「ここって何処なんだ？」

「神の説明聞いてなかったのか？さっきの奴、篠ノ乃束の家だ。つっても、即席だけだな」

「ってか、お前は何なんだ？ISは後で届くって……………」

そう、神は後で届くと言っていた。だけど、キバットがいりや変身出来るぞ！？

「ああ、その事だが……………」

「りゅーくん早くうゝ！」

「……………後で聞く」

下から束さんが俺を呼んでいる。確かに腹減ったな……………

「まずは腹ごしらえ、ってか？」

「はは、わかってんなら行こうぜ！」

キバットを連れて、部屋を出る。下に行くって言っても……………どの階段だ？

適当に行きや分かるだろ……………これでいいや。

「おお、りゅーくん流石だねえ、束さんの居場所が分かるなんて」

「

「いや……………適当つすよ……………」

「だな、近くの階段を適当に選んでたもんなゝ！」

「お前、ちょ！」

キバットがいらぬ事を言いやがった……

「ありや、そうなの？ 束さん残念だねえ……ま、いいや。早くご飯食べちゃおう」

「あ、はい！」

そんでテーブル見たんだが……え、何コレ？ テーブルに並んでたのは、和、洋、中三食がそれぞれ並んでいた。ってか朝からへビーすぎる……唐揚げとか、スパゲッティとか……

「早く食べてね！ 束さんこの後用事があるから」

「用事、ですか？」

「そうだよ。それもりゅーくんに関係してる、大切な用事だよ？ 言わなかったつけ？」

何だろう……俺に関する用事……？

聞いた方が早いよな……面倒くさいけど、聞くか……お、唐揚げ美味しい！

「あの、束さん？ 用事って何ですか？」

「えつとねえ、りゅーくんがIS使えるよーって、世界に教えるの！」

「……はい？」

束さんの言ったことに、キバットと俺が気の抜けた返事をする。え？ まだ誰も知らなかったの？……まあ、いいんじゃない？

「それで、どうやって教えるんですか？」

「もちろん、TVだよ」

「……えつと、もしかして……」

当たりたくない予想が頭に浮かんでしまった……

「うん、テレビ局全部ジャックして、会見をするんだ あ、もちろん、キックくんもだよ」

「はあああああ!？」

「あつはは………つて俺も出るのかよ!？」

予想的中………上がり症の俺にそれはきついんだが………つという
か、キバット出しているのか?つと聞いてみると、

「何とかなるよ」

何ともならねええええ!!

酷いなあ、犠牲が増えたぞ……

まあ、いいか。一人より、二人の方がいいしな……

~~~~~

今はIS学園の入学式だ。前では校長が何か言ってるが、興味ない。  
え?会見はどうなったって?………聞かないでくれ。思いだしたく  
も無い………あの悪夢だけは………

そんなこんなでIS学園に入る事となった俺だが…… 居たよ、あ  
いつが。

そう、もう一人男でISを起動出来る男、織斑一夏だ。  
つて言うか、真横だからね!??わからない方がおかしいよ!??あつ

ちは気付いて無さそうだし……………ああ、キバットは念のためカバンに入ってもらった。だって、喋られても困るし……………

『おい！お前、早く出せつての！』

『おいおい、プライベートチャネル個人秘匿通信で話すことか？つーか、今入学式…分かるか？』

『……………ま、まあ分かるけどよぉ！』

うるさいな、キバットは。つーかダメだろ、確かに会見の時、俺と一緒に出てたけど……………ちなみにベルトだけ部分展開してるんだ。ディエンドだからデザインが……………まあ、大丈夫だろ。

おっと、そんな事を考えてると話が終わったようだ。教室に早く行きたい……………あ、行けるのか。

## 束さん登場と黒歴史とIS学園入学（後書き）

えっと……こっちの方が人気がみたいなので、とりあえず更新。



Kの暴走／話は全く進まない（前書き）

タイトル通りです………… or z

## Kの暴走／話は全く進まない

「はあ……」

皆さんの視線が…凄い！一夏はこれに耐えてたのか…俺、無理かも…けど、せつかく転生させてもらったんだし、頑張らねば！目の前の一夏も頑張ってる…って、前の席一夏かよ！

「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田麻耶です！」

…沈黙。いやー、視線が本当凄い！背中痛いよー…なんつって。先生困ってるし…いやけど、後ろからも視線凄いし…横からも…死ぬな。うん。

『また死ぬのか？』

『ちょ、キバツト！…あ、そついや…かばんから出してやろうか？』

なんてふざけてみるか。今出したらそつちに集中するだろ。…頑張つて逃げるよ？先生が話をしているが、まあ寮がどうこうって話だろ…気にしない！…

『いいのか！？ラッキー！』

『…はい？皆の注目がお前に来るぞ？』

『そんなこと気にするかよ！早くしろって！』

…アホだ、こいつ。まあ、仕方ないから出してやるか。ばれないようにこそ〜と…

うおっと…自己紹介の時間か？一夏〜呼ばれてるぞ〜？そんなこと言わないけど。

「織斑君！織斑一夏君！」

「は、はい！」

おゝおゝ、慌ててるな。つと…キバットの発射準備完了！存分に暴れる！

『おいキバット！いまなら出てよし！』

『よっしゃあ！行くぜ！』

「げえ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」

あ、やべっ！キバット行っちゃだめえ！

「はっはっ！外だ！久しぶりの外だっ！」

「っはあ！？」

「何だ、こいつは？」

あゝ、千冬さんだめっ！俺のキバットがあ！そう思うと後は早い。急いで俺はキバットを掴み、机の中に放り込む。少し痛いかもしれないけど、死ぬよりはましだ！

「おい久遠、今のはなんだ？」

「あゝ…俺のパートナー、みたいなのですよ…」

千冬さんの目つき怖すぎる…っっか間違っでは無い…はずだ。パートナーだしなあ。

「そうか…以後気をつけろ」

「えっと…何にですか？」  
「周りを見る」

うーっす…うおっ！何そのきらきらした目！？まさかキバットのせい！？…やっちゃまった…

「なるべく、カバンに入れときます…」  
「それでいい。次はお前の自己紹介だ、早くしろ」

あつれ〜？優しいな？…まあ、いいか。とりあえず自己紹介！関羽に叩かれたくないし、

「何か変なことを考えていないか？」  
「い、いえ！何も！！」  
「なら早く自己紹介をしろ！」

怒った！？理不尽すぎるだろ…まあいいや、キバットも出してっ…

「えっと…俺の名前は久遠龍二です。それでこいつが相棒の…」  
「キバットバット三世だ！よろしくな！」  
「…」

ちよっ！何この沈黙！？まあいいや、座ろっ…

「ふん、まあいいだろう。この前のあれでお前を知らん奴のほうが少ないだろう」

千冬さ〜ん！？思い出したくないんですけど！？それとクラスの皆も納得した表情やめて！  
そんなことを考えてると、チャイムが鳴った。はふう、やっと開放さ

れる…

Kの暴走／話は全く進まない（後書き）

感想お待ちしてまーす……

## 一・夏・鈍・感

「なあ、お前確か……………久遠龍二だっけ？」

「ああ、そうだぜ？織斑一夏。…東さんから話は聞いている……………」

そんでもって休み時間に入ってボーッとしたかったのだが……………一夏に話しかけられた。めんどくさいけど、ここで無視すると印象悪くなるしな……………周りからだけどね！別に一夏に好かれても困るし……………

「えー？お前って東さんと仲良いのか！？」

「えっと……………ああ、そうだぜ？東さんに連れられて世界を飛び回ってたんだ……………」

「それは……………何とも言えないな……………」

おまつ、その哀れみを込めた目で見るなあああ！キバットは俺の肩に乗ってるしよう……………ううつ、酷すぎる……………あ、一応転生するときにはそんな記憶なかったんだが、キバットが教えてくれた。何で知ってるのか気になったが聞かなかった……………めんどいもん

「ええ！？龍二君ってあの篠ノ乃博士と知り合いなの！？」

ああ、声デケー……………こつちまで聞こえてるつつの他にも色々言ってるし……………あれ？そついや箒……………いましたねえ、一夏の後ろにねえ、こつちすつごく睨んでますよー？怖い怖い……………

「あの……………一夏って呼んでいいか？」

「おう、俺も龍二って呼ばせてもらうぜ？」

「了解。んで、後ろ振り返ってみな？一夏」

「ん？……………って箒！？」

「やっと気づいたか馬鹿者！」

「ああ、君が篠ノ乃箒さん？東さんから話は聞いてるよ？」

「何！？姉さんから……………」

いや、知ってるけどね！？一応初対面だし……………まーたー目ーつきーがー恐いー！東さんの話題は止めよう。うん、俺の命がもたないや。

「ああ、俺の事は気にしないで？一夏に用があつたんでしょ？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………話がある、ついてこい」

「え、いいけどよ……………チャイム鳴るぜ？」

あ、本当だ。俺のせいかな？……………そうだな、俺のせいだ。ってか、これってさあ……………原作崩壊したね、うん。

「次の休み時間にしたらどうですかい？篠ノ乃さん」

「え？あ、ああ……………そうしろ！一夏！」

「わ、分かったよ……………」

何かアドバイスをしてみる。あ、箒がこっち見たな……………一応笑っておこう……………ただの変態に見えるだろうけど！

「（な、何なのだあいつは！いきなり笑いかけてきて！……………でも、助かったから一応礼を言つとかねばな。）久遠、ありがとう。私の事は箒と呼んでも良いぞ？」

あれ、意外と好感触！？ま、まあ、あちらから言ってきたんだし……………



「いや、いいよ。俺は箒さんの恋が実るよう応援してるだけだよ？」  
「な、ななななっ!!」  
「どうしたんだ箒？顔真っ赤じゃねえか？」

あ、一応小声でだよ？一夏なら気付かないだろうが、箒が気にするだろうし。その結果がこれだよ……箒は顔真っ赤にして棒立ちだし、一夏はいつも通りの鈍感ぶりを見せてくれた。

「箒……でいいのか、チャイムがなったぞ？早く座れよ？」  
「わ、私は恋など……え！？あ……すまん、久遠……」  
「俺のことも龍二でいい」  
「そ、そうか。龍二……昼休み、話がある……それではな」  
「え、あ……分かった」

……えつと？わたくし何か変なことしましたっけ？つかキバツト鞆に入れって！

「嫌だね〜！」  
「お前なあ……あの鬼に叩かれてもいいのか？」  
「う、そ、それは……」  
「だったら早く入れ！織斑先生が来るまでにな！」  
「うい〜……」

ようやく入りやがった。疲れるねえ、わざわざこんな事しねえといけないのか……面倒だな。

……さて、と。授業が始まったんだが……あの、織斑君？何を頭抱えているのかな？

「織斑君？何かわからないところがありましたか？何でも質問してくださいね、私は先生ですから！」

おお、急に胸を張って！……む、胸が揺れている……！気にしてはいけないのは知っているのだが……

「あの、先生……」

「はい、何ですか」

まさか。

「ほとんど、いや……全部分かりませえん……」

やりやがった。おいおい、織斑君よお、そりやないだろう。って……

……俺は束さん手伝ってたからなあ……

「ええ？ぜ、全部ですか……今の所で分からないって人はいますか？」

……

沈黙ってーのは嫌いだああ！あの入学前の必読の参考書束さんに見せたら、分かりやすく説明してくれたし……ナニコレ？役得じやないかよ。流石、神！このことも想定して！

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、ええつと……電話帳と間違えて、捨てまし」

バシッ！

痛そうですね、ほっほっほ。この後、結局再発行して、一週間で覚えるようになったようだ。ま、俺には関係無い。

一・夏・鈍・感（後書き）

こっちの方が書きやすいのは何ででしょうか。感想お待ちしております！

## Sの罵倒／被害は俺だけ？

次の休み時間、一夏はさっさと筭に連れてかれちゃったから……暇だ。誰かと話したくても周りには人が居ない。遠巻きから俺を見てやがる……俺は珍獣か！？

「ちよつと、よろしくて？」

「ちよつとよろしくないです」

んあ？誰だっけ？……名前は……なんだっけ？セ……セ……そう  
だ！セシリア・モルモットだ！何でモルモットが俺に話しかける？  
…あ、一夏が居ないからか。

「まあ！何ですの！その態度は！私に話しかけられるだけでも、光栄なのでからそれ相応の態度というものがあるのではないですか？」

「だって…お前の事知らないしよ」

「なっ！私を知らない？セシリア・オルコットを！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

「へえ…セシリア・オルコットって言うのか。さっきまでセシリア・モルモットだと思ってたよ」

「なっ！？それはあなたでしょう？なんてったって2人目の男子IS操縦者ですからね」

これって、キレティイノカナ？モルモット実験生物って事だろうな。だけど、俺には束さん居たし…そーいや、色々実験してたなあ…

「えっと…まあそうだな。束さんには色々協力してたし」

「それって、篠ノ乃博士のことですわね？」

「ああ、そうだが？んで、その代表候補生さんが、何のようだ？」  
「…本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」

「へえ、そうなのか。ま、俺には関係ない…よな？」

また目つきが怖い。まあ、箒よりはマシだが…ん？千冬さん？あの人は神の域を超えてるだろ。

いや、真面目に。

「関係ありますわ！なぜなら、あなたと私は同じクラスですもの！」

「え、ああ…そうだったの。まったく気付かなかった…」

「まあ！あなた、自己紹介をちゃんと聞いていなかったのですか！？」

「周りの視線のせいでそんな余裕なかった…」

これは、本当だ。周りが俺と一夏のことをずっと見るから、緊張しまくってたからな。あいつもそうだろう…まあ、これで3人覚えれたな。一夏に箒に…オルコットだな。後は絡むまでわかんねえ…のほほんさんもあだ名しか分からないからな。本名を聞かねばならん。

「そんな理由になりませんわ！大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

あ、ちょっとイラってした。まあ、こんな小物に怒っても意味無いしな、我慢。

「すまないな、よく言われるんだよ。俺って馬鹿だしな… IS に関しては別だろうけど」

「IS のことでわからないことがあれば、まあ 泣いて頼まれたら教えてもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

え、無視ですか？あの、俺って束さんという凄い教師が居たんですけど。… まあ、いきなり抱きついてくるところ以外は完璧だしな、あの人。

「… え？ま、まあ機会があればな… あ、そついや俺って入試受けてないような…」

「… はい？」

「だから、入試受けてないんだよ。前日まで束さんと一緒だったし」

そうなんだよ、俺の会見という名の黒歴史の後、日本政府から電話が来て急遽入学することになったんだ。だからそんなの受ける暇なかったんだぜ？それでも、神から専用機もらったのだってそのときだし。束さんが持ってたんだがな… そついうことにしたんだろ。たぶん。

「まあ、関係ないだろう。どうせ負けてたって。俺のことだし…」

「そ、そうですね、あなたなんか勝てるわけありませんわ！」

うーん、勝てただろうけど、いちいち絡まれるのはメンドイ。つーことで、負けたって事でいいや。

チャームが鳴るまで、こいつは一夏を探してたな… 俺の目の前で。邪魔すぎるだろ、淑女さんよ。さすがに女尊男卑のこの世でもそりゃあないんじゃないですかい？

Sの罵倒／被害は俺だけ？（後書き）

感想お待ちしています。



篠・ノ・之・第（前書き）

タイトルはおふざけです……（笑）

## 篠・ノ・之・箒

「あの、箒さん？用事って何かな？」

「そ、そのだな…何故、私が一夏の事が好きだと思ったのだ…？」  
「見たら分かるって…」

今は昼休み。さっき言われたとおり箒に連れられて屋上に来たんだが…腹減ったなあ、これだけのためにここまで連れてこられたの？俺…辛いよ？

「……」

「話ってこれだけ？まあ、任せろ。応援はしてやる」

「へ！？あ、ああ…すまないな」

「いいて、束さんにも言われてるし…まあ、それは理由の一つで大きな理由は、俺なんかより周りの皆が幸せになれるように言う俺のモットーがあるからだ！」

「…は、はは…」

「わ、笑われた！？」

やべ、声に出しちゃった…相手も目丸くしてるし…けどなあ…転生前からの目標だからな。これ変えられないしい…ま、いいか。

「い、いや…すまん。私のためにそこまでしてくれるとは…」

「いいての、よし、話が済んだなら飯食いに行こうぜ！」

「え？あ、ああ…」

ど、どうしたかね？顔赤くして…あ！手つないじゃってるからか…けど、こうしないと早くいけないし…腹減ったああああ！！全力で走る！！

「全力で走っていくけどいい？答えは聞いてない！」  
「せめて聞いてくれえ！？」

Side 篠ノ乃 箒

久遠 龍二、私の手を握って食堂に向かっている男の名前だ。この男は自分の事より他人に幸せになってほしいと言った。正直、私には理解が出来なかった。

それは、自分がそういう事を考えず、ただ一夏の事を追いかけていたからだと思う。だが、こいつの一言で気づかされた。

……他人の事も、しっかり見て行かなければ行かねばならないと言うことだ。

つというより早すぎはしないか？え、まだ全力じゃない！？止めてくれえええ！！

Side 久遠 龍二

何か、箒が上の空になって何か考えている。まあ、いいのだが……

「おい、着いたぞ？」

「あ、ああ……」

「は？ど、どうした？……ってなるほどね……」

箒の目線を追っていくと……一夏が楽しそうに女子と食べているよ。あいつ、本当にダメだな……

「よし、箒。俺が何とかしてやる」

「べ、別に飯くらいは……」  
「いいっての、任せろって！」

そう言うで一夏達に近づいていく。もちろん、手はつないだままだぞ？

「おい、隣いいか？」

「え？ああ、龍二か。いいけどよ……あ、箒もか？」

「あつたりまえだ、馬鹿。幼馴染み何だろ？話すことあるだろうが……」

「ああ、そうだな……すまないけど、どいてくれない？」

「ええ？折角織斑君の隣になれたのに？」

「すまん！お願い！」

「俺からも頼むよ、飯食う時間無くなってしまうからさあ……」  
「……………」

箒さん？すねないの。いや……けど、すねてても可愛いな。取り合えず頭なでなで。

「なっ！？何をする……！」

「あ、すまん……可愛かったからつい……………」  
「わ、私がかわいい……！？」

ああー、顔赤らめちゃって。こら、その子！やってほしそうな目で見るなあああ……絶対やらねえぞ！

「頭……撫でくれたら代わってもいいよ？」

「りょーかい。ほらよ……」

「あ、ありがとう！はい、どうぞ！」

「ほら、箒空いたぞ？俺はいいから座れって」

「私が……可愛いかな……フフフ……」

「おーい……… 箒さん？」

「……… はっ！あ、ああ……… すまないな………」

箒さん……… 俺に言われて喜ぶんかい。

「ん？龍二、お前はどっするんだ？」

「そ、そうだぞ！お前はどっするんだ！」

「んー、後で席探すよ。箒、何食いたいんだ？俺が取ってくるよ。その間にお前は一夏と話しとけ」

「そこまでしてもらつと逆に困る！……… 和風定食で………」

「りょーかいつと………」

ふんふん、色々メニューがあるんだな。うーん……… 今日はおでんでいいか！天堂屋みたいに具は3つだったらいい……… わけないか。伊達さんが作ってたおでん旨そうだったなあ……… お、きたきた。

「ほれ、これだろ？」

「ん？ああ、すまん………」

「龍二……… 俺、もう飯食い終わったからここ座れよ？」

「いや、お前は箒と話せばいい。聞かれなくては俺はどっか行くぜ？箒さん？」

「……… 私のそばにいろ………」

「りょーかいつと……… ってああ！？」

「……… ど、どうした（のだ）！？」

「キバット忘れた………」

仕方ないんだ！箒が二人きりがいいって言われたし……… すぐにここに来たし……… 後で何か食わせよつと………

「ああ、あいつか？」

「そ、まあ気にすんな。お前らには関係ない」

「そうだな……」

「そうそう、んじゃ早く食うわ。それまでお前ら思い出話とかしときな？休み時間だけじゃ足りなかっただろ？」

……………これでよし。俺はゆっくり飯が食える……………ん、大根旨いな！  
二人も仲良さそうに話しているし……………良かった、良かった。これでいいんだ。俺は一生独り身だろうなあ、こんな感じじゃ。

「ふう……………」

「どうした龍二？何かあったのか？」

「箒……………ありがとう。けど、心配すんな、俺は大丈夫だ。お前は自分の事に集中しな？」

「あ、ああ……………助かる」

ん……………なんで俺の事を気にするんだろ。まあ、いいが……………

「あ、食い終わった…お前ら、教室戻るぞ？」

「え？ま、まだ私が食い終わってないぞ！」

「そうか……………んじゃ、俺は待つとくから、お前は先に帰っていいぞ、一夏」

「おう、分かった……………遅れるなよ？」

「はは、分かってるって！」

……………まあ、これで帰るあいつは駄目だろうな。箒さんがすごく怒ってるし。

篠・ノ・之・第（後書き）

感想お待ちしております。

## 湧き出る殺意（前書き）

タイトルは気にしないでください。



## 涌き出る殺意

「箒………今のはすまなかった」

「……………別にいい。あいつはああいう奴だからな……」

凄じ怒ってらっしゃる……………確かに一夏が先に戻るのは悪いよな。  
俺が原因だけど……………さて、どうすれば一夏が箒を好きになるんだ  
ろうか……………

「龍二……………おい龍二！」

「ふえ？……………ああ、食い終わった？」

「そうだ！早く戻るぞ！」

おおっと、意外と時間経ってる…走って帰るか。箒が追い付けるか  
わからんが。

「箒、走るか……………？」

「ああ、当たり前だ！」

「うおっ！待てって！」

それより先に走っていきやがった。んゝ、足速いな。まあ、それは  
おいといて…

「食べた後すぐに走っちゃいけませーん！」

~~~~~

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め
ないといけないな」

ギリギリ授業開始には間に合った…だけど、この授業で代表を決めるらしい。まあ、俺はめんどいし…一夏がなればいいんだよ…うん。

「クラス代表者とは、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だと考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「俺もーそれがいいなあー」

「お、俺？…って龍二！お前も俺を！」

「すまないが、お前が適任だからな…」

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「じゃ、じゃあ、俺は龍二を推薦する！」

「なっ！？まあ良いけどよ…」

おうおう、俺を選ぶなんて…なんてことしてくれるんだ！これじゃ、睡眠時間が削られる可能性があるだろうがあああ！？…まあ、戦えるなら良いけどよ！

「納得いきませんわ！そのような選出は認められません！」

おお、モルモットが机叩いて立ち上がった。ついでに言うと、一夏も立ってる。…ん？俺？もちろん座ってるよ？授業中だからね！お前らそういうところはちゃんとしろよ？

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ほほう、言っじゃないですか。お前なんかにはちょうど良いんじゃない

ないか？一夏が代表になるなんてな。俺？やる気無いからどうせ負けるよ。だって…本気で勝ちに行こうとすると、ハイカブ使うもん！

「いいですか！？k」

「だーめ」

「なっ！？」

「おい、龍二…」

「いいんだよ、どうせお前も限界だったんだろ？」

「あ、ああ…」

そろそろ授業始めて欲しいという視線が…数人から来てたので早く締めてほしいのだが。まあ、俺は良いんだけどな？その…だな、先生が俺をガン見してくるんだよ。それから開放されたいんだ！何で俺は睨まれねえと何ねえんだああああ！！

「（面倒だから）オルコットさんがやればいいと思います。そもそも、彼女は学年主席だと自慢してたので、彼女が適任でしょう」

「久遠、面倒だと思ってないだろうな？」

「あ、当たり前ですよ！俺は早く授業したいの、分かる？オルコットさん」

「決闘ですわ！」

「…あ？」

決闘って…勝ったら何もしないでいいの？ねえ、聞いてる？

「勝った方が、クラス代表ですわ！」

「「ええー…？」」

「なっ！？受けるのですかどっちなのですか！？」

おお、一夏君と気があったではないか。よし、握手しとこ。うんう

ん、友情っていいなあ。

「…しゃーない。それが手っ取り早いな」

「おう、いいぜ。俺も受けてやるよ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けるようなことをしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ？」

ど、奴隷？…あれですか、頭に性が付くやつですか。

「…まあ、俺は勝ちたいんでな…とりあえず戦えりゃあいい…」

「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない…ハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？あなたもハンデが欲しいなら今のうちですわよ？」

イラッ …いや、冗談抜きであのドヤ顔は許せん。今ここで力の差を見せ付けておくべきか…？

「いや、俺がどれくらいハンデを付けたらいいのかなーって」

「…え？」「」

「当たり前だろ？お前らが驚いてんのは、ISが使える女と使えない男の力の差についてだろうが。俺らは少なくともお前らと同位置なの…分かるか？」

「…」「」

…なんで黙るかな？殺気とか出てたかな？…千冬さんは笑わないの！その笑い方は人を怖がらせる！

「ま、まあだな。俺たちだってIS使えるんだが…相手は代表候補

生だからな。一夏はどうだか知らんが唯一試験で教官倒したらしいしな…俺は殺ってないけど」

はあ、疲れた！もう当分喋りたくない！

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それと久遠はそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

あつれ〜？俺がついでみたいな感じになってませんか？……………まあ、いい。今は授業に……………集……………ちゅ……………ZZZ……………

湧き出る殺意（後書き）

感想お待ちしております。

寮と地獄と束さんへの制裁

「……頭、痛い」

「それはお前が悪いではないか。あの人の前で堂々と寝るとは……」

ああ、そういつて頭撫でてくれるの嬉しいよ、篤さん？

……あのあと眠すぎて寝ようと思ったんだが……いやあ、鬼神ちふゆさんが恐ろしくて、何度も殴られたよ。しかも常に同じ場所を……放課後の今はもう大丈夫だがなあ。

「っていうか篤さん？部活はどうしたんだい？それと、撫でてくれるのは嬉しいんだけど、何で撫でてくれるのかな？」

「……」

「そ、そうだったな！ではな！」

くっそはええ……ん？一夏君？……俺の前の席で死んでますよ？頭から煙出してね。一気に頭に詰め込み過ぎたんだろ。そして周り！やりたそうにこっちを見るな！……俺の頭は俺が認めたやつしか撫でせんからなあ！？

「ああ、織斑君、久遠君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい、何ですか？」

「……」

山田先生が教室に入ってきた。あれ……放課後、だよな？そして、一夏、せめて返事はしようか。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

「「はい？」」

おお、やっと起きたか。いや、起きてたのかもな……………今となっ
ちやどうでもいいが。

「俺の部屋って決まって無いんじゃない？自宅通学だと聞いたんですけ
ど……………」

「俺も」

「そうなんですけど、事情が事情がなので一時的な処置として部屋
割りを無理やり変更したらしいです」

事情？……………ああ、俺たちって男でIS使えるから、他国に捕らえ
られないようにここで保護という名の監視をするためか。

「なるほど……………で、俺は一夏と同じ部屋ですか？」

「そ、そうですよ！女と同じ部屋とか安心して眠れませんか？」

「そ、そのですね……………一人が相部屋で、もう一人が一人部屋何で
すよ……………」

ん？……………一人部屋がいいに決まってるではないか。はっはっは。

「俺が一人部屋ですよね？」

「ええつと……………織斑君が、一人部屋なんですy」

「神は俺を見捨てたああああ！！」

「よし！」

何でだよ！？俺が一人部屋じゃないの！……………一夏と箒の相部屋じゃ
ないのか！？
な、ななな……………

「……………」

「く、久遠君？これが部屋の番号が書かれている紙と、部屋の鍵です」

「ま、俺もお前とが良かったんだが……これは仕方ないな」

ドヤ顔すんな！一夏の野郎……来週潰す！絶対に潰す！！

「…あ、そう言えば。一夏、お前荷物は？」

「そうそう。先生、荷物を家に取りに帰らないといけないんですけ……千冬姉？そのカバンは？」

「織斑先生だ。私が手配してやった。久遠は持ってきているだろう？」

「え？ああ、そうですね」

今日、日本に帰って来たって……酷いな。前日からホテルでゆったりさせてくれるかと思いきや、飛行機の中って……嫌だわ。

「あ、ありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう」

「で、では！時間を見て部屋に行ってくださいね」

このあと夕食は何時からだとか、部屋のシャワールームしか使ってはいけないとか……色々注意を受け、今……寮に向かっている。俺に言わせちゃこんなの……地獄への道だろ。

「えっと……あ、俺ここだわ。後で飯食いに行こうぜ、龍二」

「お前は気楽で良いよなあ……一人部屋なんだし。俺は見知らぬ人と相部屋になる可能性があるんだぜ？……まあ、夕食は一緒に食うけどな。じゃあ、後で」

はあ……………ここか。入りたくねえ……………とりあえずノックだな。

「ノックしてもしもし」

「……………」

よし、反応……………ええ！？ああ、飯食いに行ってるのか。そうだ、そうなんだ。そう言うことにしといてくれ……！

「ん、意外と綺麗だな……………」

「誰かいるのか？」

はい、死亡フラグ来ましたな。俺、このフラグ壊せたら、怖いもの無くなると思うんだ……………

「ああ、同室になった者が。これから一年、よろしく頼むぞ」

「……………」

声を出したら殺される！ちよつとでも長く……………一秒でもいいから長く……！

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っでいてな。私は篠ノ乃

「……………」

「は、はろー？」

……………ここで何か言えた 俺って凄いと思うんだ。俺が目にしたのはシャワーを使用していた筈さんだ。白いバスタオルに包まれた身体……………はい、堪能しました。もう満足です。

「り……………りゆう……………じ？」

「あ、ああ……………」

その慌てている表情もまた可愛いな……………ってそう言つことじゃなく！

「見るなっ！」

「言われなくてもそうする！」

ベッドに飛び込み、布団で身体を覆う。これで大丈夫だろ。

「な、なぜ、お前が、ここにいる…………？」

「えつとですね……………その前に着替えましょうか？ちゃんと話をしたいんだが」

「わ、分かった！ぜ、絶対に……………み、見るんじゃないぞ！」

……………あれはフリか？見てくれってフリなのか？そうだとしてみても、わざわざ死に行くなんてバカなことはいさ。……………このまま待機だな。

「い、いいぞ」

「分かった……………」

うんうん、剣道着も美しい……………

「そ、それでだ！何故、お前がここにいる？」

「俺も……………この部屋何ですよ……………」

「な、なに！？」

「ええ、昨日まではね？俺もアパート借りてそこから通学するって計画だったのよ。けどな、今日になって急にですね……………決まったんですよ」

「そ、そうなのか……………」

う、うん！俺は正しい！俺の計画はこういう物だった！東さんは残念がってたが………ん？

「ど、どうしたのだ？」

「いや、心当たりが………」

「それは誰なのだ？」

「お前の姉さん………」

多分だが、そうだろう。あの人はそれをやりそうだからな………I
Sの設計図とか渡して。

「………それは、」

「………ちよつと待ってな。今電話する」

「わ、分かった………」

東さん………今度会ったら一発殴らねばな。

「………もしもし？」

『やつぽー みんなのアイドル東さんだよ ……って切らないでえ！』

「はあ………まだ言ってるんですか、それ」

『あはは、そうなんだよ？りゅーくん』

………はあ、この人と話すと疲れる。

「東さん、話があるんだけど………」

『ん？何かな？この天才の東さんに何でも言ってごらん』

「………俺を相部屋にしたのって、東さん？」

『………あ、あははー な、なんのことかな？べ、別に篤ちゃんと同じ部屋になんて………』

「誰が筭と一緒にって言いましたかね？」

はあ、やっぱりか。

『ぎくぎくう！……ごめんね、りゅうくん。筭ちゃんを任かせられるの、りゅうくんしかいないから……』

「……………一夏じゃ、駄目なんですか？」

『いやあ、いつくんはまだ専用機持っていないからー 君しかいないんだよ』

……………さいですか。もういいや……………どうにでもなれ……………

「それだけですんで。じゃ」

『あ、うん 何時でも電話してきてね』

——ブツッ。

「……………だとさ」

「……………ウチの姉がすまん」

束さん……………絶対殴る！

「いや、俺こそ……………俺なんかで良かったか？」

「……………まあ、一夏の方が良かったが……………」

それ目の前で言われるとちょっとキツいな！まあ、俺には……………恋人なんかな……………

寮と地獄と束さんへの制裁（後書き）

相変わらず、短いですが……

感想お待ちします。

一夏の脳みそプレイヤー（前書き）

.....タイトルとの違いが.....！

一夏の脳みそブレイカー

「だるい、眠い、腹減った！」

「おいおい、まだ朝だぜ？」

「自業自得だ」

朝だよ……………眠くて辛い。いや、異性と同じ部屋で寝るとか、俺が耐えられんわ。……………あ、キバツ……………ま、いいや。どうせ水とか勝手に飲んでるだろ。

「はふう……………しゃーねーやー、もう叩かれてもいっかー」

「諦めるのかよ……………」

「私は知らんぞ？」

それよりもだな、箒さん……………君は何で普通に寝れてるのかな！？

「そついや龍二、お前って専用機持つてるのか？」

「……………いや、持ってないぞ？」

「何？……………ああ、そうだったな……………」

何で俺が持つてないように見せかけているかと言うと……………相手に情報を渡したくないからだ。箒もそれには賛成してくれた……………つてのが1つで、もうひとつは……………このままもう一機専用機貰えるんじゃない？って思ったから。束さんと箒と……………本当に少ししか知らないからな。束さんが千冬さんに言っただけなら話だが。

「というか、早く飯食おうぜ。回りの視線が……………」

「そ、そうだな……………俺たち、すごい見られてるよな……………」

「……………私には妬みの視線が多いのだが」

この学園にいる男生徒両方と親しくしてるんだからな。そりゃ、嫉妬するわ。

「ふう……………なあ一夏、ISの勉強しないか？俺と二人で」

「それはありがたいな！……………ところで、どこでするんだ？」

「俺の部屋。すなわち、箒にも後から参加してもらう、だよな？」

「ああ、私が希望したのだ……………その、だな、お前に勝ってほしいからな！」

そこは素直に一緒にいたいって言えばいいのに……………箒のそういうところが好きなんだが……………

「え、遠慮する！」

「……………お前なあ、どうせわからないと言っただろ？」

「な、何で分かったんだ！？」

「そんな事だろうと思った……………」

「馬に蹴られて死ね！」

一夏、お前キバットにライフエナジー吸わすぞ？

「んじゃ……………放課後、俺の部屋な。」

「分かった。んじゃ、教室行くか」

「俺は後で行くから、お前ら二人で行きな？」

「おう、じゃあ行こうぜ、箒！」

「あ、ああ！……………す、すまん……………」

仲良さそうなのになあ、こう見ると。だけど、一夏が鈍感だから……………なあ。

~~~~~

「——それでだな、ここはこうなって……」

「ああ、なるほど!」

「ふむ、そういうことなのか……」

放課後、俺たちは俺と篝の部屋で勉強会を開いていた。……だが、途中参加の篝も知らない事があるらしく、講師は俺だけだ。……  
…めんどくさ。あの人呼ぼう。

「ちょっと待ってろ、特別講師を呼ぶわ」

「誰なんだ?それ……ってテレビ?」

「違う、これはテレビ型の通信機だ……おい……龍二、まさか……」

「そのまさか………束さーん、見えてる聞こえてるー?」

『おー、りゅーくん おっけーだよー。あ、篝ちゃんといっくんも!何してるんだい?』

………束さんだ。開発者に聞くのが早いだろ、ってわけであとは頼んだ、束さん!

『まっかせなさい!この天才束さんがわかりやすく説明してあげるよ!』

「………相変わらずだな、束さんは」

「………姉さん………」

さてと、あいつらが教えてもらっている間に、メダルでも拭くか。一夏とモルモットをフルボッコするのはオーズじゃないよ?だけどね、綺麗じゃん だからいつも綺麗にしてるんだ。

「お前らしっかり教えてもらえよ?この人ならなんでも答えられる。

絶対にな」

『任せてー』

「あ、ああ……………龍二？それなんだ？」

「ん？来週あいつを潰すために使うIS関係の道具」

そうだよ……………結局もう一機貰えなかったよ！…ということですが、手加減しないでいいならプトティラ無双でいいや……………っと言うわけで、プテラのメダルを拭いています。おお、きれいきれい！

## 一夏の脳みそプレイヤー（後書き）

感想お待ちしています。

## 龍二の暴走は止まらない

「…金髪殺す…」

「…オルコット、俺は知らないからな」

「二人まとめてかかってきなさい！」

クラス代表を決めるための試合が始まるうとしてるんだが…何でこうなった。…さっき何があったんだ…

くくく

「…で、結局なんだったんだ？」

「何が？」

「あの勉強だ！IS使って練習してないじゃないか！」

ピットの中でクラス代表戦が始まるのを待っていたのだが…一夏君が不満を漏らしてきてる。だってなあ、お前の専用機がまだ来ていないからな、練習しようがないんだよ。

「仕方ないだろう、お前のISが来ていないのだからな」

「現在進行形だねー、束さんは何してるのかなー？」

「…練習機あつただろうがあああ！！」

一夏君が怒りました。まあ、すぐ箒さんに殴られるというわけなんだが…まあ、俺は止めるよ？箒が嫌われちゃうからね？

「な、何をする！」

「箒、お前って好かれたいか嫌われたいのか良くわからないことするよな？ここは我慢しろ…嫌われるぞ？」

「うつ…仕方ないな…」

「誰に嫌われるんだ？って痛っ！！」

…鈍感すぎるだろう。こいつは俺が殴る…全力でな。篝さんがそれをしたら駄目だろう。嫌われるのは俺だけで良いんだ。

「んで…あの、金髪野郎は何してるのかねい…」

「あれ、殴ったよな！？お前殴ったよな！？」

「確かに…暇じゃないのか？あそこにずっといるのは」

「あれ！？無視かな？無視するのかな！？」

金髪野郎がずっと上空に居るんだが…暇じゃないのかな？それとも逃げたと勘違いされたくないからずっといるのかな？それと…なんで俺が先に行かせてくれないのかな？何、俺…あいつのIS潰すと思われてんの？酷いわ…

「お、織斑君織斑君！」

「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～は～、す～は～」

「そこで、止めてください」

「うつ…」

お前…後ろに鬼神おにがいるのによくやるなあ…

「…ぷはあっ！ま、まだてすかあ？」

「目上の人には敬意を払え、馬鹿者」

…何でだろう、一夏が叩かれた時にターミネーターのBGMが流れた…あ、千冬さんだからか。

「お前もか？」

「い、いえ！……………それで、山田先生。一夏に用があるんですか？」

「あつれええ！？俺無視なの！？ねえ！！」

「あ、そうなんです！織斑君の専用ISが届きました！！」

やつとか……………さて、モルモットを倒してこいよ？

「これがお前のISみたいだぜ？一夏」

「え？ああ、これが……………」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

これって……………たしか束さんの研究所の端にあつたような……………埃が被つてた奴か。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

「あれ……………」

さて、箒さんは……………いない？どこに行ったんだろうか？

「背中を預けるように……………ああ、そうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する。」

「……………」

あれー？箒さん……………探しに行こうかな……………

「織斑先生」

「どうした久遠？」

「俺の負けでいいんで、観客席に行つていいですか？」

「駄目だ。お前を推薦した奴の事を考えろ」

「……………一夏なんですけど」  
「……………そうだったな……………」

よし、勝った。さてと、行こうかn『待ちなさい！逃げるのですか！！』……………何で見えているんだ。

「だってさ……………俺とやっても意味ないって……………弱いもん」

『だからって逃げるのですか！極東の猿はそれほどバカですのね！良く分かりましたわ！』

「……………あ？」

はい、あいつ殺す。絶対に殺す。

「織斑先生、バトルロイヤル形式にしてほしいです……………そうすれば一回で済みますよね？」

「……………そうだな。あいつはお前に任せる」

よし、これで……………良くねえええ！！箒を探しに行けないじゃん！！……………まあ、いい。金髪を叩きのめせばいいんだからな。

「一夏、俺も出る」

「え？……………お前、殺るのか？」

「当たり前だ。ただの金髪にあんな事言われて許せるかよ……………」

「……………ほどほどにな」

さてと、予定が狂ったけど……………金髪の息の根を止めにいくか。

『おい龍二！キバで行くのか？』

「んー、初めはそれでいい。んじゃ、殺りますか」

『おう！ガブッ！』

「……………変身、でいいのか？展開だよ……………」



俺はまずISを展開させ、キバットに俺の首筋を噛ませる。そしてキバットが腰に着けてあるベルトに装着されると、俺は仮面ライダーキバになるんだが……これは嫌だな。どういう状況かと言うと俺のIS、『オールドライダー』はそもそもが装甲が分厚い。その上にキバの鎧が装着されるから……凄い強そうんだけど、遅そうに見えるんだ。実際速いが。

「さてと、行きますか………」

『キバって行くぜ!!』

「ああ、龍二!」

一夏くんには悪いけど……君の出番無いかもね。

~~~~~

あれ、結局俺のせいでこうなったのか!! まあいい、全力だ!!

龍二の暴走は止まらない（後書き）

次回、戦闘開始！

感想お待ちします。

織斑一夏の暴走

「さっさと終わらせたいんだ、抵抗するなよ？」

「あら、それはハンデですかしら？」

「あのー……俺は……」

「つーか、お前がハンデほしいだろ？本当に手加減しないぞ？」

もういいや……成り行き上こうなったけど、どっちも潰せるならいいか。結局こうなる運命だったのか……

「私は代表候補生なのですよ？ハンデなんかいらないですわ！」

『龍二、あいつは射撃する気満々だぞ！』

「だとさ、一夏……行くぜ？」

「了解！」

そういうと俺と一夏は左右に分かれる。そして金髪は俺達がいた場所に《スターライトmk?》の照準を合わせてたらしく、そのまま一発撃つと、一夏に掠ったみたいだ。ま、俺には関係ないわな。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「黙れ……そんなこともできないのか？」

「なっ……！」

金髪の目の前に移動して、とりあえず邪魔な《スターライトmk?》を蹴り飛ばしておく。こうすりゃ相手はあのファンネルもどきしか使えなくなる……はずだ。

「さあて、ここからが本番だな……」

「な、なめた事をしてくれませうね！」

「そりゃ、早く終わらせたいから…行くぜ？キバット！」

『おう！ガルルセイバー！』

ガルルフォームになった俺は、いきなり形が変わったことに動揺している金髪をガルルセイバーで斬る。慌てて避けようとしたが間に合わなかったようで、直撃つと…あれ、一夏は？

「どうせ俺なんか…ええい、ままよ！」

「じゃーま…つと！」

「ぐっ！」

近接ブレード構えて突っ込んできました。ガルルセイバーで受け止めて、押し返すけどな。弱い弱い…その程度かよ？

「くっ…行きなさい！《ブルー・ティアーズ》！」

「ようやくきたか…キバット、動きを読んでくれ」

『任せろ！』

ようやく自立稼働の《ブルー・ティアーズ》を出してきやがった。遅いんだよ…全てを潰してやる…

「つたく…行くぜ？早く終わらせたいんだ…」

『そこだ、龍二！』

「おう！」

《ブルー・ティアーズ》は4機あるんだが、そのうち2機を斬り落とす。これぐらいのスピードとパターンじゃすぐ読めるっての…あいつ弱いな。代表候補生って言うからどんなもんだと楽しみにしてたが…興醒めだ、さっさと終わらせよつと。

「速い！？くっ…」

「チェックメイト」

「かかりましたわ！《ブルー・ティアーズ》は6機ありましてよ！」
「えー、何だつてー」

…ちょっと棒読みだったかな？まあ、いいや…来い、タツロット…！

「龍二！」

「もう終わりでしょうか？」

『テンションフォルティッシモ！！』

「ったく…遅いつての、タツロット！」

『すいません』

ミサイルに衝突する前にタツロットを呼び出してエンペラーフォームに変身し、ザンバットソードでミサイルを通り際に斬る。こうすると、爆発したように見えるんだよな。まあ、俺には関係ないが。

「なっ…！また形が変わった！？」

「これが本来の形だ…終わらせるぜ？」

『ウェイクアップ・フィーバー！！』

相手の懷に飛び込み、ザンバットソードで斬り、上空へ飛ばす。金髪が体勢を整える前に、蹴りの体勢に入り、そのまま相手に蹴りをかます。

「おらあ！！」

『いい感じだ、龍二！』

「っ！まだ行けますわ！！」

「そうかい……だが、終わりだ」

俺は金髪の真横まで飛んでいき、ザンバットソードを相手の首元に
つきつける。

「チエツクメイト……」

「ま、負けですわ……」

「そう、か……よし、ありがとな、戦ってくれて！」

俺は礼儀正しいの！ちゃんと挨拶くらい出来るわ！！しっかり抱き抱えて………ってあれ！？いつの間にか抱き抱えている！？

「っ！……男の方でも、こういう方がいらっしやるんですね……」

「ん？どうした？」

「い、いえっ！こちらこそ、ありがとうございます……また、先日の件は申し訳ありませんでした」

ん、いい子！俺はこういう子好きだよ？割と本気で。一夏が鈍感だからな……… 篤は残念だが。

「一夏？っておわっ！！」

「お前らのお陰でフィッティングが終わったよ……」
ファースト・シフト 一次移行もな

.....
L

あれ、怒ってらっしゃる？ま、待てよ！今は金髪を俺は抱き抱えているの！わかれよ！そりゃ空気だったのは分かるけどよ！

「つたく……オートバジン！オルコットを頼む」

「あ、あの……よろしければ、セシリアと呼んでくださいまし……」

「おう、じゃあセシリア！また後でな！」

「は、はい!!」

オートバジン（こいつも神が作ってくれたらしい）にセシリアを任せ、一夏の方を向く。

「すまないな、お前を無視して。だけど、これで本気で戦えるだろ？」

「ああ、そうだな……………うらああ!!」

力任せ、か。こんなもん避ける必要もないな。ザンバットソードで一夏の？雪片式型？を受け止め、相手の腹に蹴りを入れる。

「ぐあっ!!」

「ったく…………その程度か？だけど、流石千冬さんが使ってた剣だな。強い…………」

『龍二!!』

「うおっと……………何だよ、箒？」

朗報だ。俺が探そうとしてた箒さんが俺に通信で話しかけてきた。探す暇が省けたっていうか…………

『その、だな……………お前は一夏に勝てるのか？』

「当たり前だろ…………俺は絶対に勝つ。俺のために、そして、お前のためにもな」

『なっ!!……………そ、そうか……………絶対に勝つのだぞ!!』

「了解つと……………」

「話は終わったか？」

「おう、いくぜ!!」

一夏と距離を取り、お互いに瞬時加速をして近づき、すれ違い様に

イグニッション・ブースト

一閃する。だがな、俺の方が一步上手だ。

『試合終了。勝者――久遠 龍二』

「当然の結果だ」

「くそっ！」

すれ違い様、俺はあいつの剣にセルメダル数枚を叩きつけ軌道をずらしたんだ。ずるい？そんなこと知らない！！

「さつてと……………帰って寝るか」

織斑一夏の暴走（後書き）

相変わらず戦闘描写………… orz

Rはクラス代表／弄られる一夏

「——では、一年一組代表は久遠龍二くんに決定です！」

「…そうだった！」

「忘れてたのかよ…」

セシリアとの試合の翌日のSHRで俺がクラス代表だと言うことを聞くまでその事はすっかり忘れていた。いや、忘れたかったのかもな。これってあの…あれだ…めんどくさいなあ。

「まあ、仕方ないかあ…」

「そういう事だ、クラス代表という名に恥じないよう努力しろ」

「はい…」

ちふ…織村先生の目つきが恐ろしすぎるので、仕方なく承諾した。まあ、勝ったのは俺だからな…仕方ないっちゃ仕方ないが…

くくく

「…で、何でこうなったの？」

「確かに…」

「龍二さん！どうか私を鍛えてください！」

その日の昼休み、俺は一夏と並んでセシリアから逃げていた。なんだか俺が強いのは鍛えてるからと勘違いしてるが…残念だな、これは神から貰った力ですから。という訳で一夏を連れて逃げている。一夏も筭から逃げていたので、一緒に行くことにした…あいつの気持ちわかってやれよな？

「いい加減諦めなよ…」

「本当だ…龍二に鍛えてもらうのは俺だのにな…」

「ああ…ん？そうだったけ？」

「そ、そうだったて！お前が言っただろ！！」

…覚えてねえ。まあ、力任せに振り回してたら《雪片式型》の無駄遣い、宝の持ち腐れだからな。俺が鍛えてやる。クラス代表になつてしまった鬱憤^{うづぶん}を晴らすとき…

「いいぞ？ただし、少しだけだけだな？」

「おお！ありがとうな！」

「私もお願いします〜！！」

〃
〃
〃

「これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、久遠。試しに飛んで見せる」

今は一夏との特訓を初めて数日経った日のグラウンドでの授業中。織斑先生の命令に従い、俺とセシリアはISを展開する。一夏は…相変わらず展開が遅いな。

「どうした織斑、早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

…じゃあ、俺って熟練してるのか。初めて知った…あんまり展開してないのにな…めんどくさいから神様のおかげで！…お、ようやく展開できたみたいだな。

「よし、飛b『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜』

…」

「あ、やべ」

「久遠…今度は何だ？」

ギリギリまで変身してなかったから織斑先生の話と被ってしまった
…恐ろしや…その分山田先生って凄いやな。最後までチヨコたっぷ
…じゃなくて！

「ISの仕様です…これはどうしようもありません」

「そうか…他にもあるんだろう？」

「ええ…まあ。飛んでいいですか？」

「ああ、飛べ」

そう言われると先に飛んでいたセシリアと一夏のところへ向かう。
それにしても速いな…一瞬で追いついたぜ…恐ろしいな、オーズも
だからこそ負担があるんだろうな。

「は、速いな…」

「そうですわね…」

「確かに…俺もびっくりだよ？」

「…何でお前は知らないんだよ！」

「そうですわ！自分のISの性能くらい把握しているのが常識です
わよ…！」

…怒られちった。べ、別に怒られてもどうも思わないんだからね！！

「…流石に飛び方は安定してるな。俺が教えただけはある」

「ああ…あの鬼のような特訓のおかげでな…」

「な、何があつたんですの!？」

聞いちゃう?一夏が凄いいなくなさそうな顔してるから言わないけど…まあ、簡単に言つと下から俺が攻撃してそれから逃げるように飛ぶという特訓だ。それをセシリアに話したら、笑顔が引きつったんだが…何でだろうな?普通だと思うんだが。

「織斑、オルコット、久遠、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は10センチ。久遠は5センチだ」

「ひでえ…まあ、レディーファーストだ。セシリア、先に行きな?」

「あ、ありがとうございます…それではお先に!」

流石代表候補生だな…目視では良く分からなかったが、たぶんぴつたし目標どおりだろうな。さてと、次は俺だ。

「よし一夏、先に見本を見せてやる。後でちゃんとやれなかったら説教!」

「え!?!ちよつと待てて!」

『スキヤナニングチャージ!!』

無視つと。何でスキヤニングチャージにしたかつて?…格好いいからだよ。コンドルレッグを展開させ、そのまま地上に降下する。地上にぶつかる寸前に空中で宙返りをして、コンドルレッグを元に戻し地上に降り立つ。

「…つと、これでいいですか?」

「言うことはないだけだ。あんな危険なことはお前しかできないだろう。他の者は真似するな」

うーん、褒めることできないのかな?まあ、いいけど。ってか、疲

れるから変身解除したら…駄目ですよー。

—— ドゴオオオン!!

…馬鹿ですか？俺の完璧な着陸を見てもこうなるんですか？そうですか、馬鹿なんですね…なるほど。クレーターを作る馬鹿なんですね。分かります。

「大丈夫か、一夏！」

「ああ、なんとかな」

「おお、馬鹿が喋ったぞ、セシリア？」

「そうですね、驚きですわ…クレーターを作るほどの方が喋れるとは」

「お前らあ!!」

…セシリアが乗ってきたことにも驚いたし、一夏の怒り具合にも驚いている。まあ、面白いけど。やっぱりやめられないわ、一夏いじり。

「そうだぞ、龍二、オルコット」

「筈…！」

「こいつは大馬鹿者だ」

「お前もかあ!!」

筈さんも恐ろしい…上げて落とすという…高度なテクニックを持ってるとは。

「お前ら、そこまでにしておけ。織斑が大馬鹿者だということは前から知っている」

「千冬姉まで…」

「織斑先生だ」

「痛え！」

…学習しろよ。

Rはクラス代表／弄られる一夏（後書き）

今日中にもう一個出せるかもしれません…

再会とパーティと寝不足

「それでは、武装を展開しろ。織斑、オルコット、久遠」

「は、はあ……」

「はい」

「あ、はい……」

正直今の俺ってタジャスピナーだけなんだよなー、そう思いながら展開する俺。胸のオーランクサークルが光り、左腕にタジャスピナーが装着される。

横を見るとセシリアも武装を展開し終わってるみたいだ。

「織斑、遅いぞ。0.5秒で出せるようになれ。オルコット、さすが代表候補生だな。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃心を展開させて誰を撃つつもりだ。正面に展開出来るようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ、いいな」

「……………はい……………」

セシリアが口で負けるとは……………さすが織斑先生、格が違っぜ！

「久遠、お前は……………本当にそれだけか？」

「この状態なら、これだけです」

「そうか……………オルコット、近接用の武装を展開しろ」

あつれー？俺に関する感想は？酷くない？俺ってそんなに普通なの……………あ、普通でいいのか。まあ、異常なだけだな……………いい意味で……！！

このあとセシリアが近接用の武装を展開するのに時間がかかって、初心者向けの展開法を使つて……自分は近接の間に合入らせません！つて言つてたが、俺が入つてたことを織斑先生が言つて、セシリアに個人間秘匿通信で怒られた俺であつた。

くくく

今日は俺のクラス代表就任記念パーティがあるらしく、それが始まるまで俺は散歩をしていた。今日は一夏との訓練はセシリアに任せである。たまには休憩したいよ……

「本校舎一階総合事務受付……つて、どこにあんのよ」

……お？この声は確か……あいつか。まあ、すぐには話し掛けないでおこう。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

「おやおや、可愛い猫が迷っているみたいだな。どうした？」

「えっ！？もしかして……龍！」

「うおっ、いきなり抱きつくつてなんだよ……鈴」

そう、迷っていた奴は、鈴。鳳鈴音である。ファン・リンイン俺とこいつとは色々に関係があるんだが……まあ、これは今度話すしよう。ちなみにこいつは俺のことが好きらしい。

「だって、寂しかったし……」

「俺もだぜ、鈴。つというか、一夏に会うか？」

「あいつなんか良いわ！龍がいれば……」

「はいはい。んで、受付に用があるんだろ？」

「あ、そうそう！連れてつて？」

相変わらず図々しい奴。だが、そういうところもいいな。ってな訳で、俺と鈴は何故か手を繋ぎながら受付へと向かった。

「そっぴゃ、お前って何でまたこんな時期に来たんだ？」

「それは……私がつい最近までここに来るのを断ってたからよ」「何でまた？」

「龍がいないから……」

「そうですね……あ、了解。よくわかった。どうせこの前の会見で分かったんだろ？俺が行くって。それで行きたくなくて政府に話をしたけど、入学式に間に合わなかったんだろ？」

「さすが、龍！全部正解よ！」

誉められたくねー………だけど、女にそういわれると嬉しいな。こんな可愛い女だとさらに。

「あ、ここだ。玄関入ってすぐのところな」

「ん、ありがと………ねえ、龍って何組？」

「一組。一夏と一緒にだ」

「あいつと一緒になのね………」

そう楽しげに話し合えた俺はゆっくりとパーティ会場である寮の食堂へ向かっていった。

~~~~~

「というわけでっ！久遠くんのクラス代表決定おめでとっ！」

「おめでとっ！」

………これまた豪勢な。よくまあ、こんなパーティ開くよな、女

子の行動力がよくわからん。

「いやー、これでクラス対抗戦も熱くなるねえ」

「うんうん！」

「ラッキーだったよね、同じクラスになれて」

「そうだね！」

……… 頷いた奴。 お前ら俺のクラスじゃねえよな！？ 何でいるんだよ………

「人気者だな、久遠」

「ありゃ？ 箒、一夏といればいいのに……… 何でこっちに来た？」

「きつ、来てはいけないのか！？」

「いや、いいけど。 お前の好きな人が一人寂しそうにしてるからさ

………」

「そ、そうだな………」

箒さんが近寄って来たのでさりげなく腰に手を回し、こちらに寄せる。 驚いているが、反抗はしてこない。 何でだ？

「……… 私はどうしたらよいのかわからん………」

「おーい、箒ー？」

「な、何だ！？」

「うおっ………」

「あ、すまん………」

「いや、いいけどさ……… お前って本当に不幸だな。 あんな奴を好きになっちゃって。 まあ、がんばれよ！ 俺は応援してるぞ？」

「そ、そうか……… 助かる………」

そついうとそそくさと離れていく箒。 顔を赤くしてるのも可愛いな

あ  
.....

「セシリア、どうした？」

「あ、龍二さん。いえ……一夏さんがあまりにも飲み込みが早いので、驚いていただけです」

「ああ、今日の訓練か……」

「たたく、あいつは元々は強いんだから……セシリアが驚く訳だ。

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と久遠龍二君に特別インタビューをしに来ましたー！」

「お、インタビューか。めんどくさ、一夏だけで良くないか？」

「あ、私は二年のまゆみ黛薫子。よろしくね。新聞部部长やってます。はいこれ名刺」

「ありがとうございます」

「画数多いな。俺がこの名前だったら挫折してるわ。」

「ではではずばり、久遠君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「最初に言っておく！俺はかゝなり、強い！」

「おおっ、いいねー！」

「……………これでいいのか？俺的にはいいんだが。そして一夏は捏造される運命にある、と。」

「さてさて、専用機持ちの三人で写真撮ろっかー！」

「……………」

「そんな嫌そうな顔しないでさ！」

もちろん嫌そうな顔をしたのは俺だ。めんどくさいったらありやしない。写真なんかあっても無駄だ。

「セシリアちゃんは織斑君と手を繋いで？……そうそう。それで久遠君は真ん中に座って？……うん、バッチリだよ！」

……… 篤さんがすねとる。怖いわ……… 黛先輩の命保証するこ  
とは出来ない………

「それじゃあ、撮るよー。  $35 \times 51 \div 24$  は？」

「 $74.375$ 」

「正解！」

パシャッとシャッター音がした後、周りを見ると案の定一組全員が周りにいた。

「クロックアップか……？」

「何だそれ？」

「いや、気にするな……」

この宴は10時まで続いた。くそっ……… 眠いぜ………

## 再会とパーティと寝不足（後書き）

タイトルの寝不足はパーティの次の日の事です。

## 苦勞のI／不憫な主人公

「もうすぐクラス対抗戦だね！」

「そうだ、2組のクラス代表が変更になったって知ってる？」

…なぜ俺の机の近くで話す。せめて俺から離れてくれ…寝不足で仕方ないんだ…

「ああ…何とかって転校生に代わったのよね」

「転校生？今の時期に？」

「…」

…あきらか鈴だろ。昨日あったし…ってあいつ二組か、残念だな…色々話したかったし…

「うん、中国の代表候補生なんだって」

「ふん、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「お前なんかどうでもいいだろ…」

だって弱いしな、と言おうとしたが、その前に首根っこをつかまれた。きやー、助けてー。

「何ですって！？わたくしが弱いなんて…ありえせんわ！」

「実際俺に負けてるし？」

「あはは…けど、今のところ専用機を持ってるのって1組と4組だけだから余裕だよ」

「その情報古いよ！2組も専用機持ちがクラス代表になったの！…



つて、龍に何してんのよ!!」

「ヘルプミー…」

ようやく登場か…遅いつての。うおう、セシリアを蹴り飛ばしたか。それで…俺の前に立つ。ありがたいけど…なんでしゃがんでるの？

「助かった…ありがとよ、鈴」

「お前…鈴か？」

「別にいいわよ？あんたは困つてるときいつも助けてくれたし」

「ああ、そうだったっけ？」

「あれ、鈴さえも無視するのか！？なあ、聞いてくれない!？」

…そんなこともあつたなあ…いや、正確に言えばあつたらしいんだが。このことはキバットに聞いたから、あんまり詳しく知らないんだよな。後で、映像探すか。

「それよりも…お前つて専用機持つてるのか？」

「そうよ!…その、助けてくれたお礼とかしなさいよ…」

「ああ、だからしゃがんでるのか。おまえは本当に頭撫でられるの好きだよな？」

「ん…べ、別にいいじゃない!」

「あのー…俺はー…」

「あ、SHR始まるぞ。早く戻れ」

「あ、うん…」

寂しそうな表情を浮かべて教室を出て行った鈴。つていうと、変な感じだから、1組の教室から出て行った鈴。そして、鈴と入れ違いに織斑先生が入ってきて、SHRが始まった。はあ…また長い一日の始まりだ…

~~~~~

「まあ、昨日会ってるから……感動の再開ってわけでもないかな？」
「そうね……まあ、いいわ！」

昼休み、俺は鈴と一緒に昼飯を食べていた。それにしても一夏がすねてるな。まあ、今まで無視され続けていたし、鈴にも無視されてたから……な。

「それで……元気にしてたか？」

「もちろんよ！」

「お、それなら良かった。心配だったからな？」

「そ、そう……ありがと……」

照れてるな……見たらすぐわかる。おっとそんなこと考えるとセシリアと筭がやってきたぞ？

「龍二、そろそろどういう関係か教えてほしいのだが」

「そうですね！龍二さん、まさかこの方と付き合ってるんですか！？」

……えっと。セシリアが聞いてくるのは分かる……と思うんだが、筭さんの理由が思い当たらない。何でだ？あいつが一夏を諦める事はないと思うんだが……

「べ、べべ……別に付き合ってる訳じゃ……」

「まあ、そうだな……俺としては、こいつが恋人でも構わないんだが……」

……おふざけが過ぎたかな？鈴が固まってるし、セシリアは地団

駄踏んでる。箒は……………どこからか知らないが木刀を構えている。

「……………え、それって……………こ、告白なの……………?」

「くうう……………!わたくしはダメなのでしょうが……………!」

「……………お前って奴は!」

「ちょ、ちよつと落ち着けて!」

一夏君、登場。後はこいつに任せるか。

「あ、そうだ。一夏が言えって言ったんだな?」

「え?は?」

「……………勘違いさせてえええ!」

「許しませんわ!」

「そうか、そうか……………そうであつたか……………よし、一夏。ここで成敗してやる!」

「ちよつ!一龍二!一待てええええ!」

さてと、ゆっくり歩いて帰るか。

苦勞の工／不憫な主人公（後書き）

今回はいつもより短いです。

目覚める箒

「お前のせいでえ…お前のせいでえ…」

「…眠いな…早く寮に帰るか」

「また無視するのか！？なあ、ちよつとくらい話を聞いてくれないのか！？」

放課後、一夏が抗議しにきたが…眠すぎてそれどころじゃない。というわけで早く戻るか。面倒だし…

もし着いてきたら、捕まえてやるだけだし…

〃〃〃

「それで、案の定着いてきたというわけか、龍二？」

「ああ、だからストーカーとして千冬さんの所へ連れて行こうと思うんだが、どうする、箒？」

「勘違いだ！だからそれだけはやめてくれ！！！」

…結局着いてきました。というわけで、一夏の事が好きな箒さんが帰ってくるまで一夏を縛って…帰ってきたんだが。

「よし、そうしよう」

「おおい！？」

「いいのか、箒？ここで一夏を助けたら少しは好きになってくれるかもよ？」

「別に構わん！さあ、行くぞ！」

「俺の味方は誰もいないのか！？」

…見捨てるらしい。俺的には駄目だと言っても連れて行こうとして

だが…意外だったな。さてと、足を掴んで、引きずって行くか！！

「痛い痛い！！」

「ふう…寮長室ってどこ？」

「たしかあっちだ」

「何してんのよ、龍？」

「ストーカーを鬼の生贄にするんだ。お前も行くか？」

「もちろんよ！」

鈴が仲間になった！…って言ってもだな、一夏はやっぱりたすけて
もううとするんだな。

「鈴！助けてくれよ！」

「それで？私はどうしたらいいわけ？」

「…いるだけでいいさ。おまえらに力仕事はさせられないからな」

「おい、龍二！そんな事言うならな！せめて縄だけでも解いてくれ
よ！なあ、無視か！？無視するんだよな！？」

「近所迷惑」

「ごふっ！！」

「さすが龍ね！」

「む…」

ギヤーギヤーわめく変態に制裁を与えたら、鈴が俺の腕に抱きついてきた。まあた、誘惑しようとして…頑張りだけは褒めてあげるよ。
そして第！何故ムスツとする！？お前は一夏が…ん？

「疑問に思う事がある…第？」

「な、何だ！？」

「お前って…これが好きなんだろ？」

一夏を顎でさす俺。微笑む鈴。お前は恋敵がいないと知って喜んでるんだろ！？…あれ、篝さん？何で固まってるのかな？それと顔赤くして…

「どうした、まさかとは思うが…」

「…多分、そのまさかだ…」

「…すなわち、私の敵ね！」

「鈴は黙っとけ」

「はう…」

まさか…こいつもそうだったのか…いや、つい最近だったのか。それにしても…めんどくさくなってきたな。確かに、最近それっぽい行動が多かったが…

「まあ、その話は後ですとして…」

「あ、ああ…そうだな」

「…私も入れてくれ」「お前が入ると話がこんがらがるから駄目」
むう…

「…ここだな」

ようやく鬼の住処（寮長室）に着いたか。さっさと一夏を引き渡して帰ろう…話がめんどくさい…

「織斑先生？ちょっと俺の事を追い掛け回す変態がいるので連れてきました」

「ん？…ほんとうにこいつがお前の事を？」

「はい、そうですね…」

「そうか、なら後は任せろ」

「ありがとうございまーす」

よし、これで俺の仕事は終わったな…いや、まだだった。箒との話し合いがあつた。まあ、頑張つて一夏のことをもう一度好きにさせないとな！

「よし、帰るか…箒」

「そ、そうだな…」

「え！？もしかしてあんたたち…同じ部屋なの！？」

「…そうです…」

「…へえ、いい事聞いちゃった　じゃあ、またねー！」

「嫌な予感しかないんだが…」

「確かに…」

はあ…めんどくせえ。どうせ夜こっそり来ようとも思ってるんだろつな。まあ、それくらいならいいかな。そもそもあいつ、俺の部屋知らないから大丈夫！さてと、ゆつくり話でもするか…

くくく

「それで…おまえはどうしたいんだ？」

「私は…お前が好きだ！」

「はあ…それが本心なのか？」

「え…そうだと言ってるだろう！」

「一夏はどうなんだよ？」

…まったくめんどくさい。鈴でさえも堂々とそんなこと言わないぞ？ 第…嬉しいけどよ、一夏はどうするんだよ？

「あいつは…幼馴染だ！」

「おいおい…お前はあいつの事が好きなんだろう？ そう自分でも言っ
つて

たじゃないか…」

「そうだが…あいつは私のことを幼馴染としか見てくれないのだ」

「ああ、もう！ めんどくさいなあ！ 俺は早く寝たいの！ 俺の事好きだ
つてのは分かった！ けどな、他にも俺の事を好きって言ってく
れる奴もいる！ だから、お前も頑張れ！ 本当に、俺の事が好きなら
な！」

「??? 分かった、だが??? きよ、今日だけは??? 一緒に寝
させてくれないか？」

「いつも一緒に寝てるだろ？」

「??? まさか。

「そうじゃない!??? 同じベッドでだな? ???」

「??? 好きにしろ??? お前がしたい通りにすればいい???
??? 本当のところ言つと、ずっと待ってたんだがな！」

言っちゃったよ! どうすればいいの! ??? 結局一緒
のベッドで寝ました。変な事はしてないからな! ?

目覚める筈（後書き）

最近焦って書くので元々悪い質が更に悪くなってきたいます????

崩れ落ちるH／俺は元気

「うー……」

「はあ、何でこうなるかな……」

「す、すまん……」

箒が強引に俺のベットに入ってきた次の日、箒が咳をしていたので熱を測ったら……風邪を引いていたとき。それで俺はこいつを一人にしておける訳が無いので、看病をするため今日は学校を休ませてもらった。一夏は一緒にするといったが、あいつは居ても居なくても変わらないから……必要ない。という訳で断った。

「何でお前だけ風邪引いてるんだよ……俺は元気だぞ？」

「私に聞かれても……」

「ま、そうだよな……」

俺はピンピンしてるのに、こいつだけ風邪を引いてる……おかしくないか？夜中何かしてたんだろうな……あ、それは違うな。俺、箒の事ずっと抱きしめてたからな。寝る前に、箒が抱きついてきたからな……そのまま抱きしめた。その時から少し顔が赤かったが……あれは照れている表情だったからな。

「ま、今はゆつくり寝ろ。腹減っているならお粥作るけど？」

「……作ってくれ」

「ん、じゃあちよつと待ってろ……安静にしてろ！」

本当にこいつは……何故ついてこようとするのかな？とりあえず、さっさと作らないとな……えっと確かここに……

くくく

「ほら、出来たぞ」

「す、すまないな……」

無事お粥を作った俺は、篝の所へ持っていく。篝はちゃんとベッドでじっとしていた。それは良かったんだが……ちゃんと食べれるかな？

「うーん……一人で食えるか？」

「そっそれくらい出来る！」

「まあ、いいか……俺が食わせてやる……」

「え！？あ、その……お願いします……」

病人に無駄な労働させないようにしないと……な？というわけで、レンゲを使ってお粥を食わせることにした。

「はい、あーん……」

「あ、あーん……う、旨いぞ？」

「そうか？俺、味見してないから……どれどれ？」

「なっ……！」

篝さんは何に驚いているんだ……？……あ、間接キス？同じレンゲ使ったから？いやあ、初々しいな。

「ん？どうした？……あーん」

「えー？あー……あーん……！」

「ん、よしよし……」

「むう…あまり頭を撫でるな……………」

か、可愛い……………涙目で俺を見つめるなあああ！！俺が、我慢出来なくなるから……………」

「……………はっ！もう、お腹一杯になったか？」

「あ、ああ……………ありがとう……………」

「よし、じゃあ後はゆっくり寝ろ。睡眠が大切だからな」

「ふあ……………分かった、私は寝るとす……………くう……………」

「相変わらず寝るの早っ……………」

箒が寝ちゃったからやることなくなっちまった……………暇だから、俺も寝よう……………箒と同じところでな……………あいつを、監視する意味でも……………な……………おや……………すみ……………」

~~~~~

「……………い……………じ……………おい……………うじ……………おい！

龍一！」

「……………んあ？」

箒に起こされて外を見るとすっかり夕方になっていた。それと、俺の腕の中では箒が頬を膨らませていた……………って俺が起きるまでずっとこの体勢だったのか……………すまない事をしたな。

「やっと起きたのか！早く離してくれ！！」

「おう、すまなかったな」

「……………そ、それでいいのだ！」

一瞬残念そうな表情浮かべたな？抱きしめていて欲しかったんだろ

うな……………まあ、お詫びとしてだな、何かしてやらねばな。

「はいはい、我慢な。二回も一緒に寝たんだからな」

「むう……………それもそうだが……………」

とりあえず頭撫でておいた…疲れな。鈴よりも面倒なやつだな…まあ、いいんだけどな。それほどかわいいやつだ…無駄に疲れるけど…

「よし、飯でも食いに行くか！」

「ああ、分かった」

寮の食堂に行ったら、鈴に睨まれたり、殴られたり、俺が頭撫でて喜んだりと、色々あったが…とりあえず一日が終わった。

~~~~~

「はあ、めんどくせ〜…」

「まあ、頑張れよ！」

「お前なら出来るだろう…」

「そうですわ！このわたくしを倒せたのですから、余裕ですわよ！」

「まあ、そうだけだよ…箒さんとセシリアは厳しい…」

「…もういいや、どうせ俺なんか…」

それから数日たって、クラス対抗戦の日がやってきた。ピットには俺と箒とセシリアと……………一夏がいる。危なかった、本気で思い出せなかった……………覚えとかないとな。

『それで今日は何で行くんだ？』

「ん……………あいつの事だから近接系だろ？だからな……………オー

ズで行く！」

『了解！』

あいつというのは鈴の事だ。偶然かどうか知らないが、そういう組み合わせだった。

「さてと……………始めるか！」

『タカ！トラ！バツタ！ タ・ト・バ！タトバ タ・ト・バ！』

「頑張つてこい！」

「必ず勝つてきてください！」

「どうせ俺なんか……………」

「ああ、行ってくる！」

面倒だよな、本当。どうせ原作通りだと無人ISが乱入するんだろ

…………… まあ、なんとかなるか！！

崩れ落ちるH／俺は元気（後書き）

こんな駄作を見てくださいましてありがとうございます！

今日の俺は、阿修羅さら凌駕する存在だ！

ゝb y 龍二丁（前書き）

謝らなければならぬ点がありますが、まずは更新が遅れてしまい申し訳ありません。旅行などが続いてしまい、書く時間も少ないのに、さらに宿題などもありましたので………って言い訳になりませんね。申し訳ありません。

それともう一点。何故かガンダム成分が入ってしまいました。作者は完全に壊れました。後々更にその片鱗を見せるでしょう。それが嫌な方はお帰りください。駄作ですが、これからよろしく願います。それと、最後に。10000ユニーク突破しました。皆様のお陰です。本当にありがとうございます。ここで質問なのですが、突破記念と言うのはやった方がよいのでしょうか？まだ早いなら、コメントでご指示お願いします。

今日の俺は、阿修羅さら凌駕する存在だ！

くby龍二了

「ようやく来たわね！」

「ったく…さつさと終わらせたいんだよ、面倒だからさ」

「あんたはいつもそうね…」

「分かってくれてありがとよ」

アリーナの中央に向かって行くと、専用IS《甲龍》を展開させている鈴が俺の事を待ち構えていた。それよりも風邪気味なんだが…まさか、あれか？この前のせいかな？風邪を引いていた筈と寝ていたからなのか？そう考えていると、鈴が剣を構えたから俺もトラクロを展開して相手がどう出るかを確認する。

「俺は負けてもどうでもいいんだが…俺はどうしたらいい？」

「全力でかかって来なさいよ！？」

「ですよ…よし、始めるか」

「もちろん！はあ！！」

そういうと鈴は、俺の方に向かって剣を構えたまま飛んできて、俺に向かって剣を降りかざしてきた。俺はトラクロでなんとか防ぐと、相手の腹に蹴りを入れる。女だろうが関係無い。全力で来いと言われたから全力を出すのみだ。まあ、可愛い女の子を蹴るのは俺としては気が引けるんだが…うん、気にしないでおこう。

「ぐっ！あんた…遠慮もくそもないのね…！」

「だって全力なんだろ？これが全力。躊躇したら負けなんだ…うわっ！」

「じゃあ、私も躊躇しないわ……」

鈴は肩アーマーから衝撃砲を撃ってくる。不意をつくとは……………恐ろしいやつだ。いや、確かに躊躇したら負けだと言ったが。流石にここまで来ると怖いよな。嫌いになりそうだ」

「はぁ！？そ、それは嫌よ！？」

「あ、声に出てた？大丈夫だ、お前のことは好きだぞ？まだ、友達としてだが」

「まだって事は……………！」

「ん？だってこの学園で前から知ってるやつってお前だけだしな……………会った事もあるし」

なんか鈴さんが喜んで試合になってないような……………ちなみに箒さんはその時腹いせに一夏を木刀で殴り、セシリアは……………うん、俺は何も見えてない。まあ、ピットは恐ろしい事になっていたんだが、織斑先生が止めてくれたみたいだ。まあ、後が怖いんだがな。生きて寮に帰れるといいんだが……………あ、これってフラグ？まあ、最悪クロックアップで抜け出すか。

「……………そろそろか？」

「ん？龍が告白するまで？」

「おい。……………ほら、来るぞ！」

ようやく遮断シールドを突き破ってISが入ってきた。恐らく無人だろうが……………どうだろうな、形がまだよく分らないから、判別がつかない。近寄りたくない。近づいて攻撃されるのは嫌だし、どうせ原作通りだと……………あ、どっちにしても面倒だ。

「なっ……………何よあれ！？」

「おい代表候補生、焦りすぎだろ。とりあえず、敵って事は確かだろうなっ！」

「うわっ！……………すごいわね、あんなの撃ってくるあいつと、それを避

けるあんた……」

おい。俺はあんな人外じゃねえよ。大体お前も避けてるだろうが。まあ、一度転生してるから間違いではないかもしれないが。ともかく、俺は人間だ！カテゴリ的にはただけだな、一応は人間だ、異論は認めない。絶対にISなんかじゃないっての。というか、その俺をバカにしたような目は止める！

「ったく、面倒だし……後ろから援護頼むわ。俺は近接で攻めるから……なっ！」

「あれ弾き返すってどんなのよ……まあ、いいけど……」

………はあ、めんどくさ。やっぱり一夏にやらせりやよかったなあ………あ、無理か。あいつ空気だし、鈴に無視されるな。全く、俺がこれ（無人ISの襲来）を知ってたから良かったけどよ。

「キバット、どうすればいいと思う？」

『そうだな………数で攻める（ガタキリバ）か、力攻め（プトティラ・サゴーズ）か？』

「………コンボを使わざるを得ないって事か？」

コンボ使ったあと疲れるから嫌なんだが………そうは言ってられないしな。そうこう考えると煙が晴れてきた………うん、何かツツコミたい所があるな。まず形状。まんま………某機動戦士の『スサノオ』なんですけど？それをISサイズに縮めて………やべ、使いたい。どうしようかな………あれ、使いたいわ。マジで困る。潰さない程度にダメージ与えるか。けどな………うし、決めた。俺、あれ作る。ISコアは最悪束さんに作ってもらおう、無理だと思うが。そうなら作ればいい。うん、フラッグとかも作ろう。『グラム・スペヤル』もできるようにしないと。よし、そうと決

まれば早い。速攻で潰す。

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プットツティラノ・ザウルス』

「つと、こいつになるのは初めてだったな」

「映像見たけど……………どうなってるのかしらね？龍のIS……………」

Side 織斑 一夏

くっそ……………幕に叩かれた所が痛いぜ……………ってそれどころじゃねえ！いきなりISが入ってきたんだった！

「鳳さん！久遠君！？聞いてますか！？もしもし！！」

……………駄目だこりゃ。個人間秘匿通信は声を出さなくてもいいのにな、俺もつい最近知ったが。つまり、そこまで山田先生は焦っているようだ。まあ、俺は大丈夫だと思いますよ？だって、龍二だし。

「はあ……………まあ、あいつらに任せてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！？な、な、何をのんきな事を言ってるんですか！？」

「まあ、落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

うんうん、俺もそう思う。いや、千冬姉が心配してるかどうかで言

うと、心配してるだろうな。カップを持つ手が震えてるしな。ああ、塩を突っ込んだ。

「……………あの、先生。それ塩ですけど……………」
「……………」

……………山田先生！？間違ってもそんな事を言っちゃ駄目だ！

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……………？でもあの、大きく『塩』って……………」

「……………」

「あと、えと……………あ！久遠君の事が心配なんですネ！彼の事が好k」

「……………」

「ひい！？」

「間違ってもそんな事は言っではいけないですよ？さあ、山田先生。コーヒーをどうぞ」

「え、でもそれって……………って、や、止めてくださいいい！！」

……………うん、俺は何も見えてない。聞いてもない。山田先生が自爆して塩たつぷりのコーヒーを一口で飲まされてる間、俺はセシリアと筈のところに行った。

「い、一夏さん！先生達は！？」

「えっとだな……………今あそこに行くのは恐ろしすぎる。止めとこうぜ？」

「で、ですが！！わたくしは……………」

「……………っ！！」

「おい、筈！！どこ行くんだった！？」

簿がどっかに行ってしまった……って追いかけないと!!どっち
に行ったんだ?……こつ言つときは俺の方向音痴を恨むぜ……
…こつちだ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188z/>

IS(インフィニット・ストラトス) ~何というチート人生~

2012年1月10日22時45分発行